

# A 大学看護学科における能動的学修支援の取り組み状況 —教員アンケートからの検討—

長尾奈美, 草薙康城, 中西純子

愛媛県立医療技術大学紀要 第15巻 第1号抜粋

2018年12月

## A大学看護学科における能動的学修支援の取り組み状況 — 教員アンケートからの検討 —

長尾奈美\*, 草薙康城\*, 中西純子\*\*

### Status of Active Learning Support in the Nursing Department of University A: Determined from a Questionnaire to Teaching Staff

Nami NAGAO, Yasuki KUSANAGI, Junko NAKANISHI

Keywords : 能動的学修 アクティブ・ラーニング 大学教育 看護学教育

#### 序 文

近年、大学には教養・知識等に加え、課題発見・探求のための批判的思考力や判断力、チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担い得る倫理的・社会的な能力等を育成するため、学生の主体的な学びを重視した教育へ転換を図ることが求められている<sup>1)</sup>。これには、2012年の中央教育審議会答申において、大学教育の質的転換に向けて従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修への転換が必要という旨の内容が盛り込まれたこと<sup>2)</sup>が挙げられる。

このような背景のもとA大学では、平成28年度からの6年間実施される第二次中期計画<sup>3)</sup>で、教育の方向性として、「アクティブラーニング等により自己教育力の向上を図る」ことを掲げ、学生の主体的な学びの促進にむけて、教育方法の工夫・改善に取り組んでいる。同計画<sup>3)</sup>において、アクティブラーニングとは、教員による一方向の講義形式ではなく、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた学修法であると定義づけられている。

現在、A大学では学生の能動的な学修の促進に向けた教育に取り組んでいるものの、その方法や内容は科目担当者に一任されており、実態把握がなされていない。そこで、研究者らは、A大学看護学科における能動的学修支援の取り組みに着目し、その実態を明らかにする必要があると考えた。

A大学看護学科における能動的学修支援の取り組み状況

況を明らかにすることは、能動的学修支援の特徴や課題を踏まえた教育方法検討の基礎資料となる。以上を前提とする本研究の目的は、A大学看護学科における能動的学修支援の取り組みの実態を明らかにすることである。

#### 方 法

##### 1. 調査対象者

平成30年1月時点で、A大学における実習を除いた授業科目のうち、各科目において3コマ以上を担当している看護学科の専任教員29名を対象とした。調査科目は、延べ75科目で、科目実数は65科目であった。

##### 2. 調査期間・方法

河合塾が作成した自記式質問紙「大学のアクティブラーニング調査」<sup>4)</sup>を参考に一部改変して、平成30年1月に調査した。調査用紙は、個別にデータの配信と回収をした。

##### 3. 調査内容

調査内容は、担当科目名、授業時間内の仕組みに関する項目、授業時間外の仕組みに関する項目、反転授業に関する項目、授業で工夫していること(自由記載)、授業を進める上で困っていること(自由記載)とした。

授業時間内の仕組みに関する項目は、ペアワーク、グループワーク、ディバード、プレゼンテーション、知識定着のための小テスト、授業の振り返り時間の設定、質問の提出、質問の回答、その他(自由記載)について尋ねた。

授業時間外の仕組みに関する項目は、復習課題やレポートの提出、授業通信、その他(自由記載)とした。

反転授業に関する項目は、反転授業の実施あるいは予習

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科 \*\*愛媛県立医療技術大学保健科学部

課題、テキストベース、動画ベースについて尋ねた。各質問内容について、実施頻度を毎回、2～3回に1回、全てを通じて1～2回、なしの4件法で調査した。

#### 4. 分析方法

分析方法は、看護学科の専任教員が担当する科目の内、看護学科学学生向けに開講される科目のみを抽出したのち、質問項目ごとに単純集計を行い、概観した。その後、回答を基礎科目、専門基礎科目、専門科目や開講年次に群別し、それぞれクロス表を作成して、群間比較を行った。

自由記述の回答は、各質問項目の「その他」に関する内容では、記述内容を精読し、学修支援方法について具体的記述があるものを選定した。授業で工夫していることや授業を進めるうえで困っていることに関する内容では、内容の類似性に基づいて分類した。

#### 5. 倫理的配慮

論文投稿に際し、投稿の趣旨や個人が特定されることはないことを調査協力者へ説明し、文書にて同意を得た。

## 結 果

### 1. 分析対象の概要

調査対象者のうち、26名の教員から回答(回収率89.7%)を得た。

回答があった科目数は延べ73件であり、そのうち看護

学科の学生を対象に開講されている科目69件を分析対象とした。分析対象科目は、共通教育科目19件、専門基礎科目14件、専門科目36件であった。開講年次は、1年次24件、2年次27件、3年次9件、4年次9件であった。

### 2. 能動的学修支援の取り組み状況

能動的学修支援の取り組み状況を図1に示す。授業内の能動的学修支援は、多い順に、振り返り時間の設定82.6%、質問の回答81.2%、質問の提出69.6%、グループワーク69.6%、ペアワーク60.9%であった。実施割合が高い学修支援内容のうち実施頻度も高い項目は、振り返り時間の設定、質問の提出、質問の回答であり、いずれも約半数弱の科目で、「毎回」の授業で実施していた。

授業外の能動的学修支援は、復習課題やレポート提出73.9%、授業通信13.0%であった。

反転授業等については、反転授業や予習課題40.6%、テキストベース37.7%、動画ベース11.6%であった。

授業科目分類別の能動的学修支援の取り組み状況を図2に示す。授業科目区別で多く取り組まれている能動的学修支援の内容は、共通教育科目では、多い順にグループワーク78.9%、振り返り時間の設定73.7%、プレゼンテーション68.4%であった。専門基礎科目では、振り返りの時間64.7%、質問の回答52.9%、知識定着のための小テスト35.3%であった。専門科目では、質問の提出94.6%、質問の回答94.6%、振り返り時間の設定86.5%であった。知識定着のための小テストは、共通教育科目、専門基礎科目、専門科目の順に実施割合が増加したが、

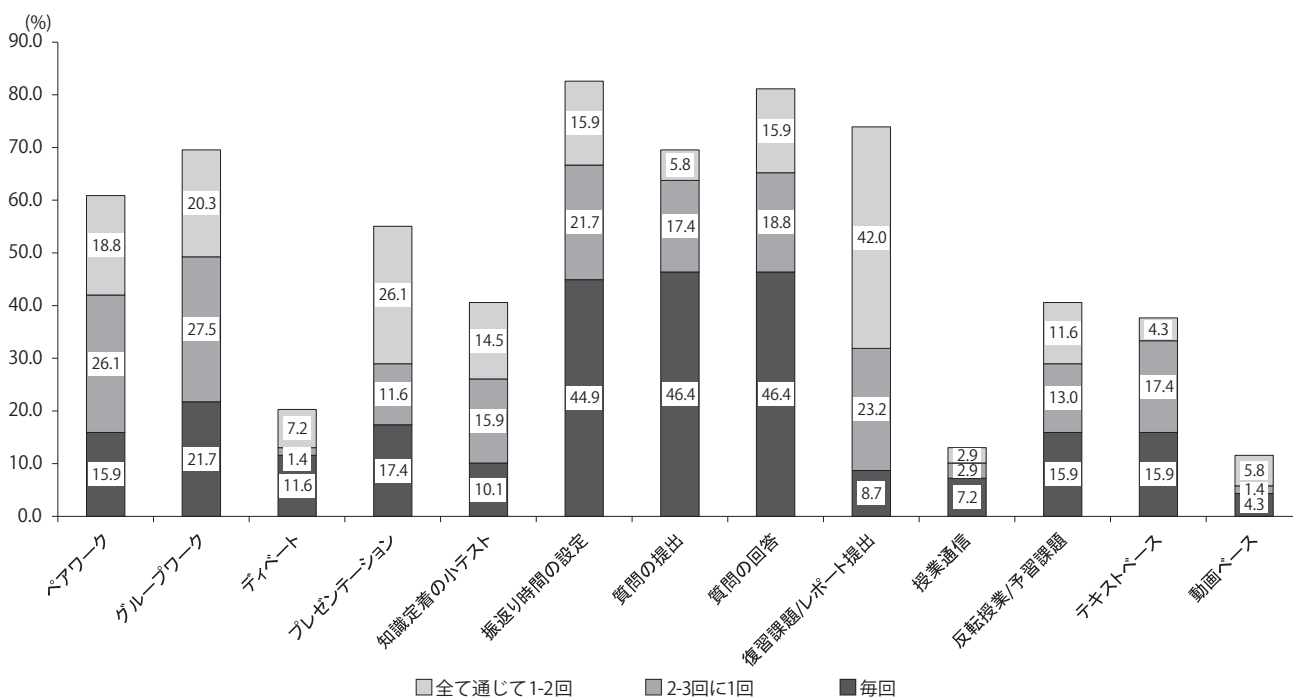


図1 能動的学修支援の取り組み状況

その他の学修支援は、専門基礎科目において実施割合が低い結果だった。

開講年次別の能動的学修支援の実施状況を図3に示す。開講年次別では、1年次開講科目と比べて2年次開講科目の実施割合が低い項目が、8項目中5項目あった。その項目は、ペアワーク、グループワーク、ディ

バート、プレゼンテーション、知識定着のための小テストであった。このうち、ペアワークとグループワークは、1・3年次での実施割合が高く、2・4年次で実施割合が低下したものの、全体として多く実施されていた。プレゼンテーションは、2年次での実施割合が25.9%と大きく低下した。ディバートや知識定着のため

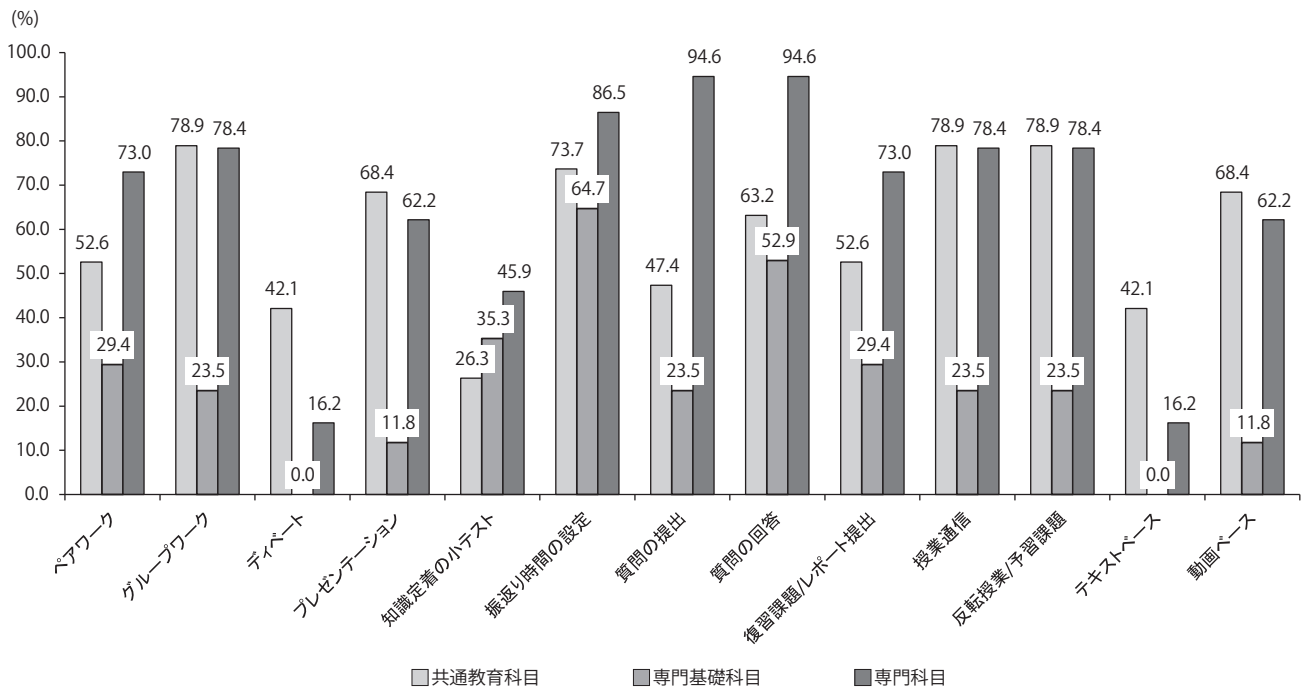


図2 授業科目分類別の能動的学修支援の取り組み状況

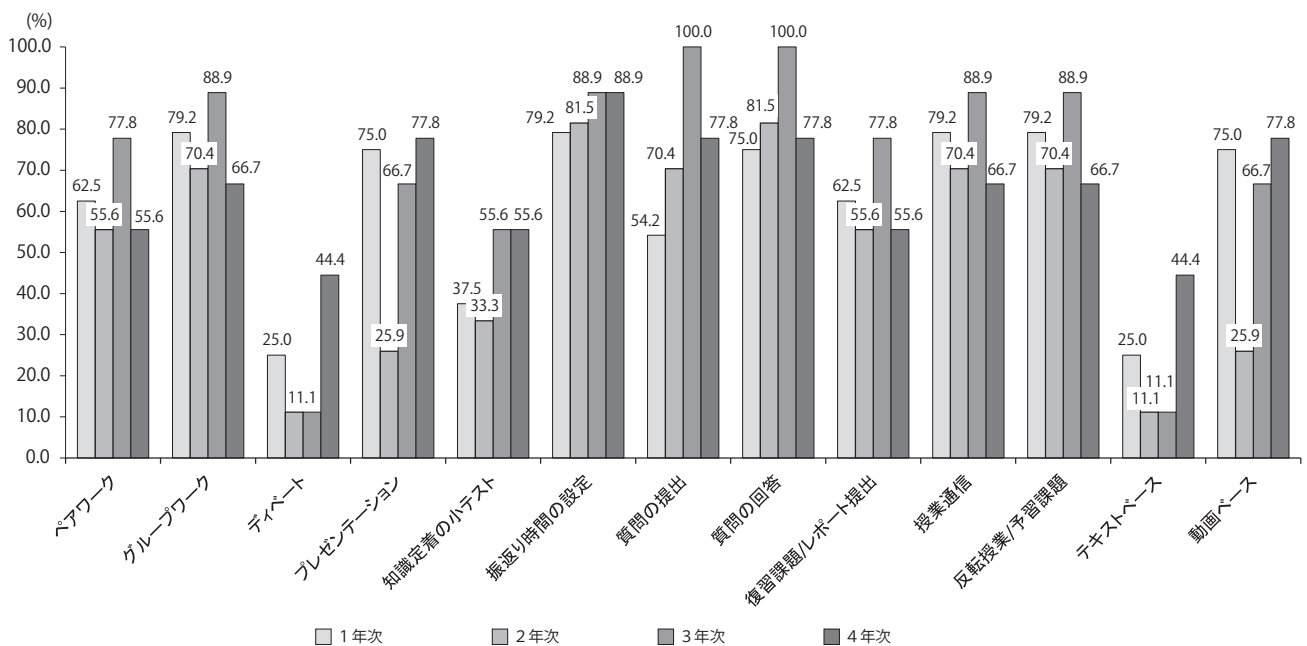


図3 開講年次別の能動的学修支援の取り組み状況

の小テストは、全項目の中で実施割合が低いものの、4年次では実施割合が上昇した。

### 3. 授業内における能動的学修支援の具体的な取り組み

69科目中、34科目について回答があった。その中から、具体的な取り組みについての記述例を以下に記す。

- 演習時には学生相互が患者役・看護師役・観察者役を経験し、患者の立場で診査を受けることで、看護師として必要な配慮について体験から学べる機会を設けている。また、観察者として、他者のケアを客観的に見ることで、自身との共通点や見習うべき点に、自分で気づけるように促している。気づいたことや留意点、修正点を、事前学習の用紙に青字で追記し、再提出するようにしている。(2年次開講, 専門科目)
- 3年生との合同授業(実習報告会参加)を実施している。また、演習の一部で、4年生の相談コーナーを設けている。課題の発表会は、実行委員に選ばれた学生が運営している。(2年次開講, 専門科目)
- グループ毎に異なる課題を与えて、各グループの発表を通して、全体が理解できるような方法を取り入れている。(3年次開講, 専門科目)
- 演習, グループワーク時は振り返りの時間を設けている。講義での

質問は、時間等を考慮して、次の授業時に回答や教員からのメッセージシートとして配布している。(3年次開講, 専門科目)

- 演習課題に関しては、学生同士の相談教え合いを歓迎している。振り返りシートに質問の記載があれば対応する。(4年次開講, 専門基礎科目)

### 4. 能動的学修に向けた授業内での工夫

授業内での工夫に関する自由記述を内容の類似性に基づき分類した結果、6つに大別された(表1)。その内容は、「学生が発言する場と学生の質問に回答する媒体や時間の設定」、「知識や技術と実生活の連動・統合を図る仕掛け」、「学習深度やレディネスに応じた教育方法の選定」、「教育支援ツールの開発と活用」、「教員数や授業時間に見合った教育内容や時期の選定」、「教員自身が興味を持ち探究する姿勢」であった。学生が発言する場と学生の質問に回答する媒体や時間の設定では、毎回30分以上質問に回答する時間を設けたり、提出課題に必ずコメントしたりしていた。知識や技術と実生活の連動・統合を図る仕掛けでは、興味関心と学習意欲向上に向けて、現実社会と学問とのバランスを図ったり、当事者の体験発表や病院見学を取り入れたりしていた。学習深度やレ

表1 能動的学修に向けた授業内での工夫

分類	記述内容
学生が発言する場と学生の質問に回答する媒体や時間の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 毎回30分以上前回講義の質問に回答する。</li> <li>• 学生主体で意見を言うことを目標としている。</li> <li>• 発問や質問の機会を意識的に設けている。</li> <li>• 提出された課題は少しであっても必ずコメントし、翌週に返却する。</li> <li>• 当日の授業で理解したことの記述を基に、次の授業時に返答する。</li> </ul>
知識や技術と実生活の連動・統合を図る仕掛け	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 興味関心と学習意欲向上に向けて、現実社会と学問とのバランスを図る。</li> <li>• 実習内容と連動した演習課題の提示と実施をしている。</li> <li>• 事例学習を通して、既修得の知識や技術と実習経験を統合する仕掛けをしている。</li> <li>• 身近にいる壮年期・向老期にインタビューした結果をレポートして、授業内で共有している。</li> <li>• 当事者の体験発表を設けている。</li> <li>• 看護のイメージ作りとして病院見学を実施している。</li> <li>• シミュレーターを使用した教育では、思考化し、全て行動に繋げることをゴールに設定している。</li> </ul>
学習深度やレディネスに応じた教育内容や時期の選定	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 既修得内容は事前学習とし、講義では国家試験問題への解説やVTR視聴時間を多く設けている。</li> <li>• 4年次開講科目であり、研究報告等の文献を抄読してのグループ学習にしている。</li> <li>• レポート課題は他の授業との重なりを確認・考慮して、期限に余裕をもたせて提出日時を決定している。</li> <li>• 幅広い学習をねらいとして、グループ毎に異なる課題を検討し、各グループの学びを共有している。</li> </ul>
教育支援ツールの開発と活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DVD作成等の教材開発</li> <li>• 関連ビデオの紹介</li> <li>• 独自の教材として、資料集とノートブックをフルカラーのイラスト入りで作成し、配布している。</li> </ul>
教員数や授業時間に見合った教育内容と方法の選定	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 教員数が少ないため、1つの授業で対応する学生数を減らし、表は技術演習、裏はグループワークにしている。</li> <li>• 教員がラウンドしながらグループワークのファシリテーターを務める。</li> </ul>
教員自身が興味を持ち探究する姿勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 教員自身が面白いと感じ、興味を示し、疑問を抱くようにする。</li> </ul>

ディネスに応じた教育内容や時期の選定では、既修得内容を事前学習とし、講義では国試問題などの時間を設けたり、他の授業との重なりを確認して課題の期日を設定したりしていた。教育支援ツールの開発と活用では、DVD作成や関連ビデオの紹介、独自教材を作成していた。教員数や授業時間に見合った教育内容と方法の選定では、少ない教員数で対応できるように1つの授業で対応する学生を減らしたり、教員がラウンドしながらファシリテーターを務めたりしていた。教員自身が興味を持ち探究する姿勢では、学生自身が面白いと感じ、興味を示し、疑問を抱くようにしていた。

#### 5. 能動的学修支援に向けた授業での困りごと

授業で困っていることに関する自由記述の内容を表2に示す。授業で困っていることは、「授業方法・内容に関すること」、「授業時間や時間数に関すること」、「学生に関すること、学習環境に関すること」に大別できた。授業方法や内容については、事前学習やグループ学習が多く学生の負担や他の科目への影響危惧や、選定した教育内容の妥当性や教育方法の工夫に対して学習効果の高まりが感じられないことなどが挙げられていた。授業時間

や時間数については、教授できる内容が時間の関係で限られていることなどが挙げられた。学生については、学生個々の理解や意見の把握の難しさ、課題をしない学生に対する関わりやなどがあった。学習環境については、大人数講義時に動きがとりにくいことや技術練習をできる環境や仕組みが整っていないこと、タブレット端末等のe-learning環境の整備の必要性が挙げられていた。

## 考 察

### 1. A大学看護学科における能動的学修支援の特徴

A大学の看護学教育における能動的学修支援の取り組みの実態調査の結果から能動的学修支援の特徴を考察する。

まず、能動的学修支援として、半数以上の教員が振返りの設定、質問の提出や回答、グループワーク、ペアワーク、プレゼンテーションを実施していると回答しており、多様な教育方法を用いていることが示された。看護学教育において、学生に質の高い授業を提供するためには、学習目的・目標、学生の状況、教材の種類、教員

表2 能動的学修支援に向けた授業での困りごと分類

分 類	記 述 内 容
授業方法・内容に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 実習終了後に技術演習をすることになり、授業を展開する順番に問題を生じ、頭づくりに影響しているのではないかと感じている。</li> <li>• 事前学習やグループ学習等が多く、学生の負担になっているのではないかと(他の科目に影響)と感じているため、事前学習やグループ学習のバランスが難しいと感じる。</li> <li>• 講義が主とした授業となってしまう。</li> <li>• 講義・演習など毎年、少しでも工夫して行っているが、全く成果は変わらない。</li> <li>• 抽象度の高い概念をいかに伝えるかが教員自身の課題である。</li> <li>• 授業で、すべてを学習することは難しく、内容を意図的に選定しているが、この選定でいいのかは、疑問である。</li> <li>• 授業のときは覚えていても、半年後の実習ではほとんど忘れていて、知識の定着を目指してどのように授業をすればいいか悩む。</li> </ul>
授業時期や時間数に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 演習ができればよいが、講義時間の関係で出来ていない。</li> <li>• 集中講義のため、反転授業の仕掛けを毎回とることが難しい。</li> <li>• 教えなければならない内容が多いにもかかわらず、講義時間は限られており、学生の理解を図りつつも効率的な授業展開ができるためにどうすればいいか悩んでいる。</li> </ul>
学生に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学生数が多いので、学生個々の理解や意見を把握することができていない。</li> <li>• 学生数が多く、なかなか目や気持ちが行き届いていないと反省している。</li> <li>• グループワーク時に教員がファシリテーターとして入るものの、やる学生とやらない学生の差、チーム間の差が生じている。</li> <li>• 授業外の課題をしてこない人が決まってきた時、どのように関わればよいかと迷う。</li> </ul>
学習環境に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学生数が100名で教室が狭いために、動きがとりにくい。</li> <li>• グループワークが多いので、アクティブラーニングスペース環境が欲しい。</li> <li>• 技術演習は、繰り返しの練習でマスターできるが、時間の関係上、現在は1回経験すれば終了のレベルである。学生たちは「練習が必要」と言っているものの、練習ができる環境にもない。自由に練習しにくい環境であることや練習する仕組みづくりができていないのかもしれない。</li> <li>• 1、2年生の計150名に対して学習用のタブレット端末が5セットしかなく、1年生へのアンケート調査でも台数不足に関する意見が多数寄せられた。また、都市部の総合大学にあるようなe-learningが本学でも存在し使えることが嬉しいとの意見もあり、アンケート以外でも「高校の後輩に自慢した」という学生もいることから、少なからず学習意欲向上に寄与していることが推察できる。可能であれば、タブレット端末の増台と本システムの拡充を急ぎたい。</li> </ul>

自身の力量などを考慮した上で授業形態を選択し、具体的条件に応じて‘その時’、‘その場’に最適な授業を展開する必要がある<sup>5)</sup>。教員が工夫していることに実習内容と連動した演習課題を提示や興味関心と学習意欲向上に向け現実社会と学問とのバランスを図ることが挙げられているように、教員は学習目的を明確に捉え、科目の位置づけや学生の準備性を考慮しながら、その時々状況に応じた教育を実施していると推察される。

続いて、授業内の能動的学修支援の取り組みを学年別でみると、2年次開講科目では実施割合が低くなる項目を多く認めた。1年次開講科目と比べてペアワークやグループワーク、ディベート、プレゼンテーション、知識定着のための小テストは実施割合が低下した反面、振り返り時間の設定や質問の提出・回答の実施割合は増加を示した。2年次に学習支援の取り組み方法に変化が生じている背景として、1年次では共通教育科目が多く開講されているのに対して2年次からは専門基礎科目や専門科目が占める割合が高くなり、看護学科専任教員が担当する科目が増えることが考えられる。2年次から授業数が増える専門基礎科目や専門科目では、知識の定着を図ることの必要性も増すため、講義法を用いた授業展開も多くなると推察される。その中でも教員は、授業において学生主体で意見を言うことを目標としたり、発問や質問の機会を意識的に設けたりといった工夫をしていることから、本調査の回答の選択肢にはなかった説明、発問、助言などの一般的教授技術を駆使して授業展開していた。このことは、教員の多くがアクティブラーニング型の授業に取り組み、知識の一方的注入でなく学生の能動性を引き出す工夫がされていることを意味していると考えられる。

アクティブラーニングは、講義一辺倒の授業からの脱却を目指しているものの、講義自体の価値を否定するものではなく、アクティブラーニング型授業の学習成果は、講義とアクティブラーニングの組み合わせ方と学生の適性により異なる<sup>6)</sup>。アクティブラーニング型授業は座学形式授業と比べ、学習者の自学自習意欲が高い<sup>7)</sup>ことから、各教員の教育活動は学生の能動的学修の促進に貢献していると推察される。

加えて、授業と課題を反転させて授業時間外に教材等を活用して知識習得を済ませ、授業では知識確認や問題解決学習を行う反転授業を4割以上が実施していることが示された。反転授業の効果には、学生の学習意欲の向上<sup>8)</sup>に加え、教育内容を減らすことなく授業時間短縮に繋がった<sup>9)</sup>などがあり、反転授業の実施を促進するための視聴覚教材や情報通信技術（以下、ICT）整備が求められていると考える。

最後に、教員は様々な教授技術を駆使して能動的学修の促進に向けて積極的に取り組んでいることが明らかに

なった。学年別や科目の特性に応じた取り組み状況を示したことは、教育課程の全体性を志向して、担当科目の教育内容や方法を振り返ることに役立つと考える。

## 2. 能動的学修の推進に向けた教育上の課題

実態調査の結果と授業を進める上での困りごとに関する記述から、能動的学修の推進に向けた教育上の課題を考察する。

まず、教員は学習内容の選定や教育方法について現状の方法でよいのか模索し、試行錯誤を繰り返していることが示されていた。教育内容の選定や教育の成果、講義を主とした授業に課題を感じていることが明らかになった。講義はアクティブラーニング型授業の構成要素であり<sup>10)</sup>、アクティブラーニング授業への転換が進み外的活動における能動性を重視するあまり、内的活動における能動性がなござりになりがち<sup>11)</sup>なことが指摘されるようになっている。外化（知識のアウトプット）を主活動とするアクティブラーニングに内化（知識のインプット）が伴うことが重要であり、内化が十分でないことで思考と活動の乖離がおきる<sup>12)</sup>。すなわち、今後は教員研修などで、アクティブラーニング型授業との繋がりを意図した教育方法について学習する機会を設けることが必要ではないかと考える。

次に、ICTを活用した教育のシステムやアクティブラーニングスペースなど学習環境整備についても困りごととして挙げられていた。ICTを活用することは授業外学習の促進に繋がり、学生の能動性を引き出すと考えられることから、システムや環境整備が求められている。

最後に、今回の調査結果を授業の開講年次別や科目分類別に示したところ、専門科目や2年次に教育方法に変化を生じていることが示された。近年、広くて浅い一般教育と深い狭い専門教育という通俗的区別を取り除き、専門教育を有機的に関連づけたり、それぞれが全体性を志向したりして機能上の統一をもたらし教育が望まれている<sup>13)</sup>。このことから、大学全体のカリキュラムを調整する際に、教員同士が科目や領域の垣根を越えて連携して能動的学修の促進に向けて互いに知恵を出し合い、教育の統合と学習環境整備を推進することが必要ではないだろうか。

## 本研究の限界

本研究で抽出された能動的学修支援は、実習を除いた授業科目のうち、1科目あたり3コマ以上を担当している看護学科の専任教員を対象としたこと、3コマ以上担当する教員が複数名いる科目は、同じ科目であるにも関わらず複数の意見が反映されていることから対象の選択バイアスが生じていることが本研究の限界である。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2018) : 平成27年度文部科学白書 第5章 高等教育の充実.
- 2) 中央教育審議会 (2012) : 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申).
- 3) 愛媛県立医療技術大学 (2018) : 公立大学法人愛媛県立医療技術大学中期計画.
- 4) 河合塾 (2016) : 大学のアクティブラーニング導入からカリキュラムマネジメントへ. 河合塾編著, p.18-28, 東信堂.
- 5) 杉森みど里, 舟島なをみ (2014) : 第5章 看護学教育授業展開論. 看護教育学, p.214-215, 医学書院.
- 6) 小山理子, 溝上真一 (2018) : 「講義への取り組み方」と「アクティブラーニングへの取り組み方」が学習成果に与える影響. 日本教育工学論文誌, 41(1), p375-383.
- 7) 辻義人, 杉山成 (2016) : 同一科目を対象としたアクティブラーニング授業の効果検証. 日本教育工学会論文誌, 40(Suppl), p045-048.
- 8) 平山正晃, 竹嶋順平, 北原信子ら (2018) : 成人看護学の授業における反転授業とラベルワークを用いた授業効果, 帝京大学福岡医療技術学部紀要, 13, p55-61.
- 9) 關谷暁子, 森下英理子, 葭谷愛子ら (2018) : 専門実習科目における反転授業化の試み(第1報) 動画の事前視聴が学生の学習行動の変化と学びの深化にもたらした影響, 臨床検査学教育, 10(2), p219-225.
- 10) 小山理子, 溝上真一 (2018) : 「講義への取り組み方」と「アクティブラーニングへの取り組み方」が学習成果に与える影響. 日本教育工学会論文誌, 41(4), p375-383.
- 11) 松下佳代 (2015) : ディープ・アクティブラーニングへの誘い. 松下佳代, 京都大学高等教育研究開発推進センター(編著) ディープ・アクティブラーニング. 勁草書房, 東京, p1-27.
- 12) 森朋子 (2017) : 「わかったつもり」を「わかった」へ導く反転学習の学び. 森朋子, 溝上真一(編著) アクティブラーニングとしての反転授業[理論編]. ナカニシヤ出版, 京都, p19-35.
- 13) 杉森みど里, 舟島なをみ (2014) : 第3章 看護学教育課程論. 看護教育学, p106-109. 医学書院.

## 要 旨

本研究の目的は、A大学看護学科における能動的学修支援の取り組みの実態を明らかにすることである。方法は、A大学看護学科専任教員のうち実習を除く授業科目のうち、各科目において3コマ以上担当する者を対象として自記式質問紙調査を実施した。結果、半数以上の教員が実施していた授業内での能動的学修支援内容は、振り返り時間の設定や質問の提出・回答であった。授業科目分類別で最も多く実施している能動的学修支援内容は、共通教育科目ではグループワーク、専門基礎科目では振り返り時間の設定、専門科目では質問の提出と回答であった。能動的学修支援は、開講年次別でみると2年次に実施割合が低下している項目が8項目中5項目あった。これらより、教員は様々な教授技術を駆使して能動的学修の促進に向けて積極的に取り組んでいることが明らかになった。今後は、教員同士が科目や領域の垣根を越えて連携して能動的学修の促進に向けて互いに知恵を出し合い、教育の統合と学習環境整備を推進することが必要と考える。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。